



Title	認知された家族の諸側面：計量テキスト分析による男女比較
Author(s)	大西，彩奈；堀内，孝
Citation	対人社会心理学研究. 2019, 19, p. 8-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71968
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

認知された家族の諸側面^{1) 2)} —計量テキスト分析による男女比較—

大西 彩奈(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

堀内 孝(岡山大学大学院社会文化科学研究科)

本研究の目的は、青年が家族をどのように認知するのかを明らかにし、認知内容における男女の相違を検討することである。大学生 236 名(男性 95 名、女性 141 名)に 20 答法を実施して、得られた家族に関する記述に計量テキスト分析を行った。認知内容の構成要素として得られた 13 個のコードと男女の回答の関連を探索するために対応分析を行った結果、男子の回答は「本人」、「社会的背景」、「経済力」、「社交」と関連が強いものに対して、女子の回答は「関係性」、「家族」、「身体的特徴」、「日常生活」、「価値観」、「出生」、「コミュニケーション」と関連が強いことが示された。「性格」と「娯楽」に関しては男女差がみられなかった。以上の結果から、男子が社会的に決定される家族の側面をよく認知し、自分自身を意識するのに対して、女子は家族内で決定される家族の側面をよく認知し、家族成員や家族全体を意識することが示唆された。

キーワード: 認知された家族、20 答法、計量テキスト分析、KH Coder、大学生

問題と目的

自立の基盤となる親子関係と家族関係

青年期の発達課題の一つに自立が挙げられる。親からの精神的自立は、単に親から分離することではなく、親との信頼関係を基盤として独立した個を確立し、より高次の対等な人間としての親和性を親との間に獲得することを指す(水本, 2009)。親子間のより高次の親和性の獲得は親子関係の再定義にみられる(落合・佐藤, 1996)。具体的には子の自立の過程において、中学生では「親は子を危険から守るもの」と捉えるのに対し、大学生や院生では「親は子を信頼・承認し、頼りにするもの」として捉え直す。また、高坂・戸田(2005)は、青年の心理的自立を「成人期において適応するために必要な心理・社会的な能力を備えた状態」と定義し、青年が家族機能を肯定的に認知しているほど青年の心理的自立の程度が高いことを示した。このように、家族内の母子関係や父子関係、あるいは両親と子の関係といった特定の二者関係や三者関係だけでなく家族全体の関係も、青年が自立するための重要な基盤になる。

青年の自立に対する家族の影響

青年が自立していく過程において、家族関係や家族との関わりが青年の心性に影響を与えることが、これまでの研究で明らかにされている。林・岡本(2003)は、家族アイデンティティを、「自分は家族の一員であるという感覚が、斉一性と連続性を持って自分の中に存在し、また、それが他の家族成員にも承認されているという認識」と定義している。そして、大学生を対象とした調査から、家族アイデンティティの形成と個としてのアイデンティティの形成は密接に結びついたものであり、家族アイデンティティを持つことは、自己の確立に重要

な意味を持つと推察している。また、職業選択や、配偶者を選択して家庭を築くことは青年期から成人期にかけての発達課題であり、青年の職業決定への積極的な取り組み(高橋, 2008, 2009)や結婚観(山内・伊藤, 2008)に親からの影響が及ぶことが示されている。これらの研究が示すように、家族からの自立の過程にある青年の心性は、家族や親からの影響を受けている。

そして、青年の心性が受ける家族の影響は、家族の実態や他の家族成員の認知ではなく、青年自身の家族に対する認知に依拠する。例えば、大島(2013)の研究において、青年が両親からの支持的関わりを受けていると認識するほど、青年の抑うつは低く、幸福感が高いことが示された。一方で、両親の認識する子への支持的関わりと青年の抑うつや幸福感との間には関連がほとんどみられなかった。そこで、家族の影響を理解するためには、青年が家族をどのように認知するのか明らかにする必要があると考えられる。

男女間にみられる家族の影響の相違

青年の心性に対する家族の影響は、男女で異なることが指摘されている。例えば、「家族の一員である」という感覚は、男子の個としてのアイデンティティの形成にあまり大きな意味を持たないものに対して、女子の個としてのアイデンティティの形成には重要な役割を果たすとされている(林・岡本, 2003)。また、男子は家族機能が低い場合に、個としてのアイデンティティの発達が一般的に阻害され、本業である学業と学生生活に対する意欲低下傾向が強まるものに対して、女子は家族機能が授業への出席、学業や学生生活に対する意欲低下傾向にほとんど影響を与えないことが示唆されている(白石・岡本, 2005)。しかし、このように家族の影響が男

女間で異なる原因については十分な議論がなされていない。

青年の心性が受ける家族の影響が青年の認知に依拠することを踏まえると、家族の影響が男女で異なる要因の一つとして、家族に対する認知の男女の相違が考えられる。これまでに、男子よりも女子は家族満足度が高いことや(岡本, 1990)、家族の親密性を高く評価すること(中見・桂田, 2008)が示されている。これらの研究からは、女子が男子よりも家族を肯定的に認知することが窺えるが、男女の家族に対する具体的な認知内容は捉えられない。男女で家族の影響が異なる要因として青年の認知内容に着目し、家族に対する認知が男女で異なるのかについて検討する必要があると考えられる。したがって、本研究では青年が家族をどのように認知するのかを明らかにし、その認知内容における男女の相違を検討することを目的とする。

20 答法による家族に対する認知内容の測定

青年の家族に対する認知内容を明らかにするには、認知内容に含まれる構成要素を捉える必要がある。しかし、測定内容が予め定められた方法(i.e., 尺度)では、青年の家族に対する認知内容に含まれる多様な構成要素の測定が困難となる。そこで、青年個々の有する家族に対する認知内容の構成要素を見出すために、参加者が自由度の高い反応を示すことのできる 20 答法(Kuhn & McPartland, 1954)を用いることとした。20 答法は、回答者に“私は誰か?”という質問に対して、20 個の異なる答えを“私は…”に続けて自由に記述させる自己概念の査定法である。田附(2017)では、親のイメージを測定するために 20 答法を援用し、親のイメージに関する様々な回答が得られたことを報告している。本研究においても、青年の家族に対するイメージ、つまり青年が家族をどのように認知しているのかを測定するために 20 答法を援用することは妥当であると考えられた。そして、20 答法により得られた記述の分析には、テキスト型データを数量的に扱ってデータを整理・探索し、内容分析を行う計量テキスト分析(樋口, 2014)を採用した。

本研究の目的

本研究は、青年期後半の大学生を調査対象とした。そして、20 答法を実施して得られた家族に関する記述に計量テキスト分析を行い、家族に対する認知内容の構成要素を明らかにし、認知内容における男女の相違を検討する。

方法

調査参加者

中国地方の大学生 236 名(男性 95 名、女性 141 名、

平均年齢 19.21 歳($SD = 1.38$))が調査に参加した。大学の講義時間を利用して募集した場合と、調査者の縁故により募集した場合の二つの方法で調査参加者を募集した。内訳は前者が 182 名、後者が 54 名である。

調査期間

2017 年 4 月から 5 月にかけて調査を実施した。

質問紙の構成

質問紙は、Kuhn & McPartland(1954)の 20 答法、フェイスシート(性別、学年、年齢、出身地、家族構成)から構成された。本研究は、大学生がどのように家族を認知しているのかを明らかにすることを目的としているので、参加者には“私の家族は…”に続く文章を 20 項目以内で自己記述させることとした。教示文は山田(1989)にならい、次のようにした。

“自分の家族”ということで、あなたの頭に浮かんできたことを、20 項目以内で、“私の家族は…”に続けるようにして、1、2、3、…20 の順に書いて下さい。どういうことを書いたらよいとか、どういうことを書いてはならないということはありませんので、思いつくままに自由に書いて下さい。

手続き

第一筆者が調査の目的について説明した後に調査用紙を配布し、調査への参加に同意した者のみがその場で回答を記入した。調査用紙は、回答の記入後に速やかに回収された。大学の講義時間で参加者を募集した場合には、講義時間内で調査を実施した。第一筆者の縁故により調査参加者を募集した場合には、調査参加者の都合の良い日時に合わせて、大学の敷地内にて同様の手続きを踏んで調査を実施した。倫理的配慮として、回答は匿名であり、研究以外の目的で用いないことと、調査は自由参加であることを事前に説明した。

分析方法

20 答法で得られた回答は KH Coder 3a 版で分析した。分析手続きは、田附(2015, 2017)を参考にしながら、『KH Coder3 リファレンス・マニュアル』(樋口, 2017)に準拠し、計量テキスト分析を行った。

結果

20 答法の回答項目数

20 答法により 3501 個の回答が得られ、平均回答項目数は、14.83 個($SD = 5.49$)であった。不備のあった回答を除き、224 名(男性 87 名、女性 137 名、平均年齢 19.2 歳($SD = 1.35$))から得られた 3361 個の回答を最終的な分析対象とした。

語の抽出

得られた記述の誤字脱字を訂正したのち、形態素分

析を行い、記述された単語を品詞ごとに分類した。その結果、1589 種類の語が抽出された。KH Coder を用いた先行研究の中で、田附(2015, 2017)は、抽出語の出現回数をもとに分析対象を決定し、平野(2015)は、品詞と出現回数により分析対象とする抽出語を決定していた。これらを踏まえて、本データの 1589 種類の語のうち、「名詞」「サ変名詞」「形容動詞」「動詞」「形容詞」「名詞 C」の品詞の中から 8 回以上出現した 158 語を用いた。田附(2015, 2017)の分析対象とした語の数は、それぞれ 167 語と 145 語であったので、本研究で 158 語を分析対象とすることは妥当であると判断した。

コーディング

コーディングとは、いくつかのカテゴリーにデータを分類していく作業を指し、「特定の記述がデータの中にあればそのデータを特定のカテゴリーに分類」というルールをコーディングルールという(樋口, 2014)。樋口(2014)は、コーディングルールを、一つひとつの言葉ではなく、概念・コンセプト・事柄の出現回数を数えるために作成することができるとしている。そこで本研究では、家族に対する認知内容の構成要素の出現回数を数えるために、コーディングルールを作成することとした。コーディングは、田附(2015, 2017)を参照しながら実施された。田附(2015, 2017)は、同じ意味の異なる表現や概念的に類似したものをまとめてコーディングをしている。そして、コーディングルールに沿ったコーディングが回答文の原文と一致して行われているかに関して信頼性を担保するために複数名による協議を行っている。本研究においても、コーディングの際にコーディングに関する信頼性と妥当性を担保するために、心理学を専攻している大学 4 年生 2 名の協力を得た。

具体的なコーディングの手順は次の通りである。まず、第一筆者が似通った概念を指す抽出語をカテゴリーとしてまとめ、各カテゴリーが表す認知内容の構成要素を表現するコードを設定した。カテゴリー作成の基準には、親に対する認知内容の構成要素を示した田附(2017)のコーディングを参考とした。田附(2017)のコーディングには、回答者自身や家族を表す「本人」、「家族」のカテゴリーに加え、親の性格傾向や社会的特性(i.e., 所属)、日々の生活に関わるもの、親と回答者の関わりや、親と他者との関わり等、親に対する認知内容の構成要素が幅広く含まれている。本研究と田附(2017)では、調査参加者に対して前者が家族に関する認知内容を問い、後者が親に関する認知内容を問う点に違いがある。しかし、本研究の調査から、家族の性格や社会的特性、生活の様子、家族内の関係性や家族と他人との関わり等、親に関する認知内容の構成

要素と類似した記述がみられた。そこで、カテゴリー作成の基準として田附(2017)のコーディングを用いることは妥当であると判断した。その後、回答文を確認しながら、回答上で抽出語が指す意味を、より適切で包括的に捉えられるようにカテゴリーとコーディングルールの編集を繰り返した。最後に、コーディングルールに該当する抽出語が各カテゴリーに割り振られているかについて協力者と協議して検討し、コーディングの妥当性を担保した。そして、コーディングルールに従って正しくコードが回答文に割り当てられているかについて、適宜回答文を参照しながら協議することでコーディングの信頼性を確認した。コーディングの結果を Table1 に示す。

対応分析

男女間にみられる家族に対する認知内容の相違を見出すために、男女を外部変数とし、コードと男女の二つの変数を用いて対応分析を行った。対応分析は、二つの離散変数内のカテゴリー間の関係を分析する(Clausen, 1998 藤本訳 2015)。また、複数の離散変数についての多元表を 2 元表に変換することで、二つ以上の変数を同時に分析することも可能となる。具体的に対応分析とは、2 次元空間上にプロットされたカテゴリーの位置関係から、複数の離散変数内のカテゴリー間の連関を分析する方法である。KH Coder は、対応分析の結果を 2 次元の散布図で表し、散布図の原点付近には、出現パターンに特徴のないコードが布置され、原点から各外部変数の方向に離れて布置されているほど、各外部変数に特徴的なコードとして解釈することができる。本研究では、対応分析に用いた離散変数がコードと男女の二つであったため、2 次元を構成する両軸が同一の成分となり、一直線上にすべてのカテゴリーがプロットされた。一つの成分で全カテゴリーの位置が決まっていることから、KH Coder より得られた結果に基づいてすべてのカテゴリーを 1 次元上にプロットした図を作成した(Figure 1)。

「男」付近に、「本人」、「社会的背景」、「経済力」、「社交」の四つコードが布置されていたことから、これらのコードは男子の回答と関連が強いと判断し、男子の回答に特徴的なコードとみなした。

「女」付近には、「コミュニケーション」、「出生」、「価値観」、「日常生活」、「身体的特徴」、「家族」、「関係性」のコードが布置されていたことから、これらのコードは女子の回答と関連が強いと判断し、女子の回答に特徴的なコードとみなした。

そして、原点近くに「性格」と「娯楽」のコードが布置されていることから、この二つのコードが男女両方の回

Table 1 コーディングルール

コード名	コーディングルール	含まれる抽出語例
家族	回答者の家族を指す語	家族、全員、母親、父親、両親、兄、姉、弟、妹、兄弟、女、男
本人	回答者自身を指す語	自分
出生	家族の成員の生まれや年齢に関する語	出身(出身地)、誕生
社会的背景	家族の職業、教育水準に関する語	仕事、働く、出身(学歴)、頭、
経済力	家族の経済力や財産に関する語	お金、金持ち、持つ、生活費、車
社交	家族以外の他人を指す語や他人との関係に関する語	親戚、他人、関係、人、祖父母
身体的特徴	家族の身体や健康に関する語	身長、太る、声、健康、利く
性格	家族成員の性格や家族の雰囲気に関する語	性格、真面目、優しい、にぎやか、寂しい、明るい、楽しい、変
日常生活	家族の生活に関する語	ご飯、料理、住む、家、家事、早起き、寝る、食べる
娯楽	家族が余暇に楽しんでいる娯楽に関する語	テレビ、スポーツ、旅行、買い物、趣味、音楽、野球、ゲーム、出かける、読む、漫画、インドア
関係性	家族内の関係性に関する語	思いやり、大事、仲、支える、仲良し、喧嘩、干渉
コミュニケーション	家族内のやり取りに関する語	話す、会話、連絡、言う、喋る、話
価値観	家族が持つ価値観、考え方、嗜好に関する語	大切、主義、厳しい、好き、大好き、嫌い

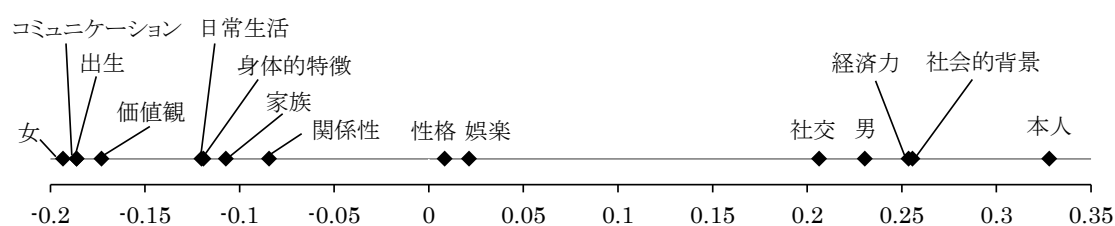


Figure1 男女を外部変数とした対応分析

答に同程度の確率で出現していたと判断した。

考察

本研究の目的は、青年の家族に対する認知内容の構成要素を明らかにし、家族に対する認知内容における男女の相違を検討することであった。大学生に実施した20 答法より得られた回答から、家族に対する認知内容の構成要素として13 個のコードが見出された。13 個のコードと男女の回答との関連を検討した結果、次の結果が得られた。男子は、「本人」、「社会的背景」、「経済力」、「社交」の四つのコードと関連が強かった。一方女子は「関係性」、「家族」、「身体的特徴」、「日常生活」、「価値観」、「出生」、「コミュニケーション」の七つのコードと関連が強いことが示された。「性格」と「娯楽」のコードは、男女のどちらとも強い関連は見られなかった。

伝統的性役割と認知内容における男女の相違

本研究において示された、男女間にみられるよく認知する家族の側面の相違は、男女が持つ性役割態度との関連が考えられる。男子の回答と強い関連を示した「社会的背景」、「経済力」、「社交」コードは、家族の仕事や教育水準、経済力、家族の付き合いに関する認知内容である。このことから、男子は女子よりも家族の枠を超えた社会的に決定される家族の側面をよく認知すると考えられる。渡邊(2017a, 2017b)は、他者ではなく個人としての行動を重視する「伝統的な男性役割」の5 側面を指摘している。その1 側面をなす「社会的地位の高さ」は家庭の領域における男性役割を構成し、「稼ぎ手として社会的な成功を収めていること」と定義されている。青年期の男子は、家庭の外の社会に視野を広げ、社会で成功を収めて地位を築くという伝統的な男性役割態度を持ち、自らが担うべき役割と関連した家族の側面をよく認知すると推察される。

一方、女子の回答と強い関連を示した「関係性」、「身体的特徴」、「日常生活」、「価値観」、「出生」、「コミ

コミュニケーション」コードは、家族内の関係性や身体的な特徴や、家族の日頃の様子、家族で共有される価値観、出生にまつわる情報、家族内のやりとりの様子といった認知内容である。つまり、女子は男子よりも家族内で決定される家族の側面をよく認知すると考えられる。このような家族の側面は、家族内のコミュニケーションの維持、関わりの促進、ものやサービスの供給、そして家族関係の把握といった Hagestad(1986)の主張する家庭内で女性に期待されてきた性役割に関連すると考えられる。男性は外で仕事をし、女性は家庭を守るものとされてきたように、家庭内労働への従事は、女性に期待される伝統的な性役割と言える。したがって、女子も男子と同様に、家庭の領域における伝統的な性役割態度を持ち、自らの担うべき役割と関連した家族の側面をよく認知すると推察される。

また、女子が家族の身体的な特徴を男子よりも認知するという結果からは、女性の性役割特性として期待される「美・繊細さ」(伊藤, 1986)や、現代の女性の「瘦身願望」(馬場・菅原, 2000)が示すような女性の外見への高い関心が自分の家族に対しても向けられていると考えられる。

発達 の 2 志向性と意識の対象における性差

男子の回答に自分自身を指す「本人」コードがよく出現したのに対して、女子の回答に家族成員や家族全体を指す「家族」コードがよく出現した。この違いには、個人の自律と他者との関係性に対する志向性との関連が推測される。伊藤(1993, 1998)は、人間の発達 の 2 側面を捉える概念として、個人志向性と社会志向性を提起している。この 2 志向性から人間の発達過程を捉えると、男子は個人志向性優位型、女子は社会志向性優位型を示し、その差は青年期において顕著であることが指摘されている。さらに、伊藤(1993)は、男女の優位な志向性の違いを、男子が自己の確立を前提として他者との関係性を築くのに対し、女子は他者とのつながりの上に自己を作り上げていくという人格形成のプロセスの差を示唆するものだとしている。この性差を踏まえると、青年期に自己の確立の過程で、自律を志向する男子は、個人としての自分に意識が高まり、他者との関係性を志向する女子は、家族成員や自分を含む家族全体に意識が高まると考えられる。

男女で共通した認知内容

性格と娯楽に関する家族の側面は、男女とも強い関連がみられず、男女双方から同程度に認知されていることが示された。性格は他者を認知する際の中心的内容の一つであり、認知対象が家族の場合にも基本的な認知内容になりうるであろう。また、家族の趣味や娯楽は、家族と過ごした余暇を通して男子と女子が認知

してきた家族の側面であると考えられる。

本研究の意義と課題

家族に対する認知内容の構成要素と男女の回答の関連を検討し、家族に対する認知は伝統的な性役割と発達 の 2 志向性における男女の相違との関連が推察された。男子は、社会的地位を築くという性役割に基づき、個人として社会的に決定される家族の側面をよく認知すると考えられた。一方で、女子は、家庭内労働への従事という性役割に基づき、家族の一員として家族内で決定される家族の側面をよく認知すると考えられた。家族の影響が青年の認知に依拠することを踏まえると、家族の影響が男女で異なるのは、よく認知する家族の側面が男女で異なることに起因すると考えられる。男女の家族に対する認知における差異を具体的に示し、家族の影響が男女で異なる背景の一部を明らかにした点に本研究の意義があると言える。

最後に、本研究の課題について述べる。本研究は、家族に対する認知内容が男女で異なることを、青年の伝統的な性役割への態度と発達 の 2 志向性の 2 つの観点から考察したが、実際に測定したのは家族に対する認知内容のみであった。伝統的な性役割への態度と発達 の 2 志向性を併せて測定することにより、これらに基づいて、家族に対する認知が男女間で異なるのかについて、さらに検証することが今後の課題である。

引用文献

- 馬場 安希・菅原 健介 (2000). 女子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究, 48, 267-274.
- Hagestad, G. O. (1986). The family: Women and grandparents as kin-keepers. In Pifer, A. & Bronte, L. (Eds.), *Our aging society: Paradox and Promise* (pp.141-160). New York: W. W. Norton.
- 林 奈那・岡本 祐子 (2003). 青年の家族行事体験が家族アイデンティティ形成に及ぼす影響 青年心理学研究, 15, 17-31.
- 樋口 耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— ナカニシヤ出版
- 樋口 耕一 (2017). KH Coder3 リファレンス・マニュアル Retrieved from <http://khcoder.net/dl3.html> (2018 年 1 月 15 日)
- 平野 真理 (2015). レジリエンスは身に付けられるか—個人差に応じた心のサポートのために— 東京出版会
- 伊藤 美奈子 (1993). 個人志向性・社会志向性に関する発達の研究 教育心理学研究, 41, 293-301.
- 伊藤 美奈子 (1998). 人間の発達をとらえる際の 2 志向性概念の提唱 心理学評論, 41, 15-29.
- 伊藤 裕子 (1986). 性役割特性語の意味構造—性役割測定尺度(ISRS)作成の試み— 教育心理学研究, 34, 168-174.

- 高坂 康雅・戸田 弘二 (2005). 青年期における心理的自立(Ⅲ)—青年の心理的自立に及ぼす家族機能の影響— 北海道教育大学紀要(教育科学編), 55, 77-85.
- Kuhn, M. H., & McPartland, T. S. (1954). An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, 19, 68-76.
- 水本 深喜 (2009). 青年期から成人期への移行期の親子関係—特に母娘関係に焦点を当てた研究の展望— 青山心理学研究, 9, 71-82.
- 中見 仁美・桂田 恵美子 (2008). 大学生における父親の認知と家族機能との関連 家族心理学研究, 22, 42-51.
- 落合 良行・佐藤 有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 岡本 かおり (1990). 大学生の人生における実存的傾向と家族満足度について—The Purpose In Life Testを用いて— 家族心理学研究, 4, 83-95.
- 大島 聖美 (2013). 夫婦間の信頼感と両親からの支持的関わりが若者の心理的健康に与える影響の男女差 発達心理学研究, 24, 55-56.
- 白石 尚大・岡本 祐子 (2005). 大学生の意欲低下傾向とアイデンティティ発達, 家族機能の関連性 青年心理学研究, 17, 1-13.
- Sten-Erik Clausen. (1998). *Applied Correspondence Analysis – An Introduction*. Sage Publications, Inc.
- (ステンエリック, C. 藤本 一男 (訳・解説)(2015). 対応分析入門—原理から応用まで—解説・R で検算しながら理解する オーム社)
- 高橋 彩 (2008). 男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, 16, 159-170.
- 高橋 彩 (2009). 女子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, 17, 208-219.
- 田附 紘平 (2015). アタッチメントスタイルと自己イメージの関連—20 答法による探索的検討 パーソナリティ研究, 23, 180-192.
- 田附 紘平 (2017). アタッチメントスタイルと親イメージの関連—20 答法による探索的検討 パーソナリティ研究, 25, 191-205.
- 渡邊 寛 (2017a). 伝統的な男性役割態度尺度の作成と信頼性・妥当性の検証 心理学研究, 88, 488-498.
- 渡邊 寛 (2017b). 性別多様化する男性役割の構造—伝統的な男性役割と新しい男割を特徴づける 4 領域の提示— 心理学評論, 60, 117-139.
- 山田 ゆかり (1989). 青年期における自己概念の形成過程に関する研究—20 答法での自己記述を手がかりとして— 心理学研究, 60, 245-252.
- 山内 星子・伊藤 大幸 (2008). 両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響—青年自身の恋愛関係を媒介変数として— 発達心理学研究, 19, 294-304.

註

- 1)本研究は、第一筆者が平成 29 年度に岡山大学文学部に提出した卒業論文を一部加筆・修正したものである。
- 2)本研究の執筆にあたり、岡山大学大学院社会文化科学研究科の齋藤圭介先生、及び岡山大学大学院教育学研究科の三宅幹子先生より有益な示唆をいただきましたことを記してお礼申し上げます。

Perceived aspects of family: Comparing responses between men and women by quantitative context analysis

Ayana ONISHI (Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University)

Takashi HORIUCHI (Graduate School of Humanities and Social Sciences, Okayama University)

The purpose of this study was to clarify how youths perceive their families and to examine whether there are differences between men and women in contents that they perceive their families. The Twenty Statement Test was administered to undergraduate students (95 men and 141 women) to measure how they perceive their family, and quantitative context analysis of the responses was conducted. Correspondence analysis was applied to clarify the relation between responses written by men and women and 13 codes that compose the perceived content about family, and it is indicated that men's responses associate with "self", "social background", "wealth", "social life" and women's responses associate with "family", "relationship", "physical characteristic", "daily life", "values", "birth", "communication" and that "characteristic" and "recreation" associate with both sex's responses. From the above results, the following two things are implied. One is that men perceive the family aspect defined in society and they are particularly aware of themselves. The other is that women perceive the family aspect defined in their family and they are particularly aware of family members or the whole family.

Keywords: Perceived family, Twenty Statement Test, Quantitative content analysis, KH Coder, Undergraduate students